

大陸（満州）

私の戦中と戦後

福井県 渡邊 一雄

私は父渡邊重吉、母操の長男として生まれ、糸生小学校卒業後、父の製材業及び農業に従事した。

私が十九歳になった十月頃、南満州鉄道株式会社の入社試験に合格して、県庁の職員に引率され、神戸港より大阪商船「うすりゆ丸」に乗船、大連港に上陸、大連駅から連京線開原駅に下車、二カ月の見習を経て中信号所に勤務する。

零下三〇度の当地では、寒さや雪には強いと思っていた私も苦勞した。日中の作業は転鉄器の油掃除、貨車の入替え作業等であり、安全に対する

監視は常に心掛け列車の運行には少しの油断もできません。中信号所の任務は中信号所一カ所で転鉄器の開閉を「テコ」により集中開閉する所です。少しの油断もできません。

車両の脱線でもしたらそれこそ大事故になり、列車の運行には重なる業務です。私もようやく一人前になった頃、奉天鉄道局から思いもよらぬ北支へ派遣を命ぜられました。

戦争で戦区が延び、鉄道は重なる任務となったのだと思います。当地で軍用列車を多く扱いました。今度は北支での戦いの中の任務で、これもお国のためと私はお受けしました。

北支では八路軍及び蒋介石軍との戦いです。その頃はまだ治安が非常に悪かったと思います。

開原駅の皆さんに見送られ北支へと向かいました。途中、奉天鉄道局へ立ち寄り北京へと向かいました。北京で一泊、翌日北京駅出発、豊台・保定・石家荘に下車して順徳駅の貨物係として勤務に就きました。

順徳は四方に城門がある大きな町でした。日本の兵隊さんも多くおり、軍の貨物所もあり、私は日勤者として毎日駅に務める業務です。

日曜日は遊ぶ所もなく、治安が悪く、遠くへ行く所もなく寝ていたり魚釣りをして遊んでいました。当地は物には不自由なく、西の山がかすんで見える所を「ラクダ」に荷物を載せ、一人が六、七頭、栗や柿、ナツメ、梨等なんでもある所でしたので、生活には困るような事はなく、良い所であると思いました。

当時は治安が悪く、鉄道警備隊の十人ほどの日本の兵隊さんが警備していましたので、日本人の駅員は安心していましたが、三カ月経った頃、

満鉄から派遣の矢野という駅員が、寝ている所まで入ってきて拳銃で撃たれ死亡しました。火葬によりお骨を親元にお送りしたように覚えています。

昭和十四年八月頃、徴兵検査を石家荘で受け、甲種合格しました。どこへ入営するのかと案じておりましたら、金沢騎兵第九連隊へ、昭和十五年一月十日入営すべしとの通知を受け取りました。

十一月下旬頃、私は少々早いが入営のため駅員や一般の方の見送りを受けて帰国しました。これまでが私の青春時代だったと感じました。満州・朝鮮・下関・大阪を通り鯖江駅で下車し、西田中まで電車で、その先四キロほどは歩いて帰りました。

父母は非常に喜んでくれました。東京に嫁入りしていた姉が四ツ谷におり、一月十日まで、そこで泊りました。弟がすでに所沢の少年航空兵として入っており、学校へ面会に行きたいと思いましたが、ただ宮城前で拝礼して帰りました。

近所の人達は家の前に「祝入営」の門柱を立て、
青杉葉を差して祝ってくれました。

昭和十五年一月九日朝六時に起き、仏壇に出征
を報告して武運を祈り、村営神社に詣で、近所の
人達に挨拶しました。当時まだ糸生村だった役場
前に十人ほど集まり、鯖江第三十六連隊への入営
者と同じく、役場兵事係から注意等受け、大城野
という村境まで見送りを受けました。

騎兵へ入営する二人は金沢駅で下車して十一屋
町で一泊して騎兵隊の門前で父と別れ入営しまし
た。

あつけない別れとなりました。その晩は赤飯で
祝ってくれました。次の朝より古兵達に毎日のよ
うに打たれ、初年兵のつらさを初めて知りました。
初年兵は第一中隊の五班に入りました。騎兵隊は
特技を持つものが多く、私は蹄鉄工務兵を命ぜら
れました。私は一般兵を念じていたのでしたが、
だめだったと思ひ、つらかった事が夢のように思

いだされます。

十四年兵の一泊の年一度の会合には、楽しい思
い出話に夜中まで話がつきません。

八面通は山が多く、人が入ったことがない山、
広い湿地帯が多く、熊・オオカミ・キツネ、植物
では松の実が大きい松林が多くあり、熊が木に登
っているのを見ました。アムール河が国の境界に
なっています。冬期は結氷し北海道あたりまで結
氷するようです。

昭和十八年三月、思いもよらず金沢の第五十二
部隊へ転属命令があり、内地へ帰り、現役解除、
除隊となり故郷へ帰りました。

昭和十八年四月、華北交通の社員である証明書
を送って戴き、朝日町丹生の西田中警察署長の渡
航証明書を持って鯖江駅で切符を買い渡航の準備
をしました。内地にいればすぐ召集が来ます。

当時の私の家族は、両親と姉妹二人、弟が二人
と七人家族です。姉は東京の四ツ谷、妹は武生町

に嫁に行っておりまして。次男はすでに少年飛行兵となるべく所沢飛行学校に入っています。私や姉や弟に最後になるかもしれないと思い東京へ行って会って来ました。

五月上旬、私は父母に見送られ華北交通順徳駅へと出発しました。順徳駅に到着、駅長や駅員に挨拶し、駅の荷物係として勤務につきました。治安は三年前と変わっていません。駅前にはトーチカができていました。勤務は二十四時間制です。

昭和十八年の夏頃、父からの手紙が来て、知り合いの子である、上坂百合子をお前の嫁にして籍を入れたので、朝鮮論山まで行って結婚してくれとの事でした。年老いた父の頼みであり承知するほかになかったのです。駅長と共に領事館まで行って証明書を受け、朝鮮の家まで行って結婚し、順徳へ連れて帰り、駅近くの社宅での生活が始まりました。

昭和二十年一月、長女が生まれ、名を静代と命

名しました。静かな世であって欲しいと思い、また幸せな時代であって欲しいとの思いで付けたのです。

その頃から敵機P51戦闘機が、機銃掃射や三〇キロ爆弾の爆撃をするようになりました。またロッキードP38という二つ胴の飛行機がくるようになりました。

昭和二十年八月十五日、日本敗戦を天皇の放送で知りました。敗戦を知り女子、子供等はすぐ石家荘まで引き揚げよとの上司の命令でした。

一週間後に、鉄道関係に男の世話する者がおらぬので、駅長から行ってくれと頼まれ、私も石家荘まで引き揚げました。石家荘以南は鉄道放棄した中国人の社員に任せました。

大原方面から引き揚げて来る人達には子供のお骨を納めた白木の箱を持ってくる人が沢山おりました。私達は石家荘・豊台・天津と半年あまりかかって、昭和二十一年二月一日に我が家に帰りました。

戦後の労苦と食料難

戦後、我が家は食料には非常に困った。二反の田圃では十俵ほどしか取れない。肥料なく、畑を田にする事など苦労した。配給制度で村では何も買えない。衣料も切符制度。我が家では子供三人と姉夫婦が帰って来た。弟や妹も当地で家を建てた。私達の村は山間地で田は少なかつた。配給米ではとてもやりきれない。

馬鈴薯・甘藷・南瓜等食べられる物は何でも食べた。山を開いて畑にして作物を作った。水はポンプにより揚げ二反ほどの農耕をした。

戦後、父母は元気で、家業をよく助けてくれた。

昭和二十三年四月、父の友人の紹介で北陸配電へ入社した。その年六月に福井地震がおき福井市の街は焼野原となった。でも好事もあった。幅広い道路、下水道の整備に力を入れて街は良くなったと思う。福井の人はよく働いた。家を建て瓦の代わりに杉の小葉板がよく売れた。父は元気で小

葉板造りによく働きました。

日曜日には私も父の仕事を手伝った。或る日、父の友人で村を出て行く人が、山を売りたいので買わないかとの話しがあり、私は近い所だったので買う事にした。その山にはまだ松や杉の木も少々残っていた。今買って植林しても私の孫か曾孫あたりが金になるかなとも思った。

山の上の方は平なので畑にして最初西瓜が多く採れた。子供達はよく食べた。私は会社に勤務なので休日しか山に行くことができない。畑にした近くで温泉が出たので町が売ってほしいとのこと、不承不承ながら売る事にした。売った山は今町の温泉となり、「泰澄の杜」と名をつけ盛えている。今私は毎日のように入浴しています。お蔭様で八十五歳元気です。

妻・百合子は三年前に亡くなりました。長男は福井へ出て設備の仕事をしている。静代は奈良県へ嫁ぎ、重子は大阪へ、弟は横浜に家を買っています。

北支で生まれた長女も六十歳にもなろうとしている。今思えば人生は浦島太郎のようだ。私は八十五歳にもなる。今は一人で何不自由なく暮らしている。時々孫達が来てくれるのが何よりの楽しみだ。今年の暮には横浜にいる末の子、明彦が来る事になっており、楽しみに待っている。

満州戦線

終戦時の「どさくさ」

福井県 矢部 皓

(旧姓 安田)

私の生まれ育った所は福井の山奥で、分水嶺から日本海に注ぐ暴れ荒河といわれた「九頭竜川」の上流です。日本列島も太平洋側は気候温暖で地味豊饒ですが、反面、裏日本は日本海に向かい、特に冬期は雨天が多く、シベリア嵐が真正面に来ます。こういう地方の山間僻地で育った人間は、いかに苦しく、また貧しくとも辛抱強く、忍耐して働いていました。

住んでいたところは、下宇坂村の宇坂大谷で、部落の戸数は五十軒です。すべて善人で人情味豊かな所で、農業、林業と養蚕等で生計を立てていました。

私の家族は、両親の元に八人兄弟姉妹の十人で、